NEWS

新日本開発株式会社を視察

平成２７年１０月２６日（月）・２７日（火）の２日間、兵庫県姫路市の新日本開発（株）の本社工場の視察を目的とする研修指導委員会（石山 進委員長）による施設見学会が会員４９名の参加のもとで開催されました。

新日本開発（株）は、昭和４７年に廃油などのリサイクル事業を手掛ける会社としてスタートしました。その後、焼却しなければならない廃棄物の適正な処理という社会的要請に応えるべく、築炉メーカーと共同で焼却設備を設置したことが現在の業態の始まりとのことでした。

社訓として、顧客第一に徹し、社業である環境産業を通じて社員の生活向上を図るとともに、安全衛生の向上に寄与し、地域社会に貢献することを掲げてみえます。

永川代表取締役

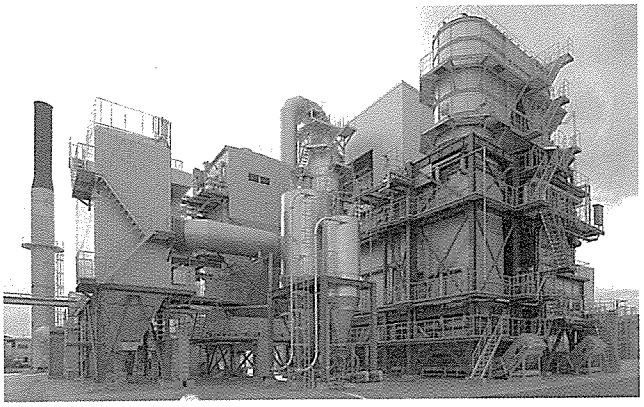
特に、製造工場などで使われている「ご安全に！」を合言葉に、安全最優先という方針で、一人ひとりの安全と健康促進を推進し、安心して働ける風通りの良い職場環境をつくるために労使一体となって取り組んでみえるお話は印象的でした。

新日本開発(株)及び(株)アール・ビー・エヌの概要説明

また、平成１５年２月にＩＳＯ１４００１の認証を取得し、「すべては、地球の未来のために！私たちは、一人でも多くの人の心にやさしく地球を慈しむ気持ちが定着するよう、美しい自然ときれいな環境づくりに貢献してまいります。」と環境方針を掲げられ、環境負荷物質の排出抑制及びリサイクル資源の有効利用等の活動により環境汚染の予防に積極的に取り組むために、重点取組みテーマと環境保全活動の目的・目標を設定し、環境マネジメントシステムの継続的改善に取り組んでみえるとのことでした。

同社は、最終処分場の逼迫を考慮し、廃棄物を可能な限り資源化する取組みとして７つの取組みを掲げているとのことでした。

1. 廃棄物の焼却処理による減容化、無害化
2. 廃棄物の混合処理によるセメント製造工場向けの燃料、原料化
3. 木くずの破砕処理によるセメント製造工場向けの燃料、原料化
4. 溶融処理によるプラスチック類の原料化
5. 燃え殻のセメント製造工場向け原料化
6. 油水分離施設活用による廃油の燃料化
7. 仕分けの徹底による金属成分の資源化

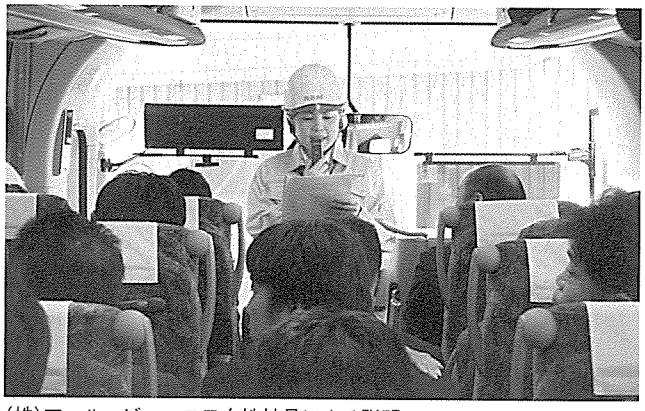

４号炉（ロータリーキルン＆ストーカ炉）

同社の施設は、１号炉（ロータリーキルン＆ストーカ炉　能力：７２ｔ／日）、２号炉（ロータリーキルン＆ストーカ炉　能力：７２ｔ／日）、３号炉（多段式焼却炉　能力：７２ｔ／日）、４号炉（ロータリー

キルン＆ストーカ炉　能力：９３.６ｔ／日）の４基の焼却施設（能力３０９.６ｔ／日）が設置されており、民間の焼却施設としては日本で有数の規模を誇っています。特に４号炉は焼却により発生する廃熱をボイラで回収し、蒸気タービン（タービン出力５２０kW）を回して発電機（発電出力２７０kW）により発電し、全量プラント運転に利用されています。平成２５年度の実績では３７５MWhとのことでした。

車内での説明と永川常務のご挨拶

平成２５年度の廃棄物受け入れ量は一般廃棄物約１万９千トン、産業廃棄物約５万５千トン、特別管理産業廃棄物約８千トンで、総受け入れ量は８万２千トンとのことです。処理後に排出される混合汚泥や木くずなど２万２千トンはセメントの原燃料としてリサイクルされ、焼却処理後の燃え殻９千トン、ばいじん１千４百トンはセメント原料としてリサイクルされ、合計で３万２千トン余がリサイクルされています。また、埋立処分されるものは、ばいじんの６千７百トンとのことで、廃棄物を可能な限り資源化する同社の取組みを示すものでした。

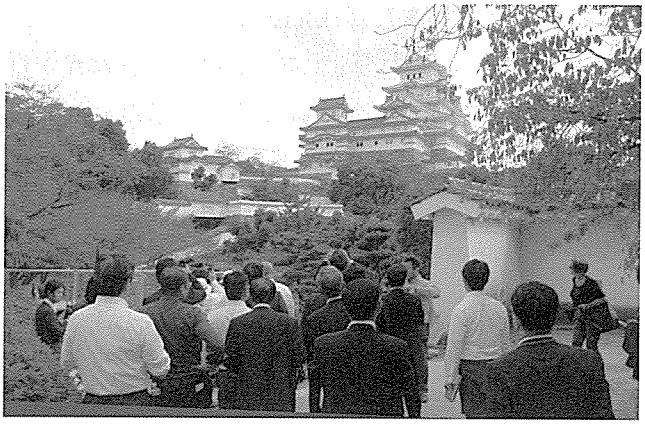


(株)アール・ビー・エヌ女性社員による説明

また同社の事業所内には、新日本開発（株）とプラントメーカー他との共同出資による家電リサイクル工場（株）アール・ビー・エヌが設立されており、冷蔵庫のリサイクルプラントから発生する断熱材フロンをパイプラインで新日本開発（株）の焼却施設に直接送り込んで、破壊処理をしているとのことでした。

玄関での記念写真

視察に当たり、ご多忙中にも関わらず永川代表取締役から直々に歓迎のお言葉とご説明をいただき、また、大勢の方々にご配慮をいただきましたことを参加者一同深く感謝申し上げます。



姫路城の観光

視察後、姫路市内にある天然温泉を備えた「姫路キャッスル　グランヴィリオホテル」に宿泊し、視察の印象を話し合うなど親睦を深めました。

二日目は、専任ガイドのユーモアを交えた楽しい案内で「平成の大修理」により蘇った白鷺城（姫路城）の観光を十分に満喫することができ、参加者にとって例年になく楽しい有意義な施設見学会でした。